

## 分析哲学と現象学

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/43357">http://hdl.handle.net/2297/43357</a>

#### 分析哲学と現象学

現代哲学はこの両学派によっておおよそ二分されていると言っても過言ではないが、現在、分析哲学にしても現象学にしても、その学派の本質条件となるようなテーゼや研究方法によってそれらを定義することはできない。最も安易で誤解を招きやすいとはいえ、なお幾分かの真実を含んでいる分類の仕方によれば、分析哲学とは英米系の現代哲学のことであり、現象学とは独仏系の現代哲学のことである。もう少し実態に即した分類では両者の違いは主に、それがどちらの伝統につながるのか、つまりフレーゲ、ウイトゲンシュタイン、ラッセル (Bertrand Russell)、クワイン (Willard Van Orman Quine) らの著作にもっばら言及するのか、もしくはフッサール、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、ガーダマーらの著作にもっばら言及するのかという点に求められる。それゆえ、一般的な思想傾向としての両者の特徴は語りうるものの、個々のテーマにおける両者の対立点はますます曖昧になってきている。こうした事情をふまえながら、なおも両者の対立の鳥瞰図を与えるとすれば、一方の分析哲学の側には

言語を哲学問題の主戦場と見る言語中心主義、物理学に範をとる自然科学中心主義、数理論理学との密接な関係、行動主義的な心理学との連携、志向的現象の因果過程への還元（因果的説明の優位）、存在論における物理主義、自我主観の超越論的機能なるものへの不信といった傾向があり、他方の現象学の側には言語の背後の現象そのものへ遡ろうとする反-言語中心主義、人文・歴史科学の問題意識を尊重する精神科学中心主義、形式論理への不信、精神分析学・ゲシュタルト心理学との連携、志向的現象の特権性の擁護（因果的説明の限界）、存在論における反-物理主義、自我主観の超越論的機能の強調といった傾向がある。これに加えて、言語分析にもとづく倫理学やメタ倫理学の展開（分析哲学）と実存主義的倫理学（現象学）との対立を挙げてもいいかもしれない。しかし、いずれにせよこういった特徴づけはきわめて大まかなものであり、両者の間の硬直した対立や一方による他方の単純な克服といったものを意味するわけではない。たとえばフッサールの生活世界のアプリオリとウィトゲンシュタインの世界像との類似性、言語行為論から志向性分析へと向かったサール（John Roger Searle）の現象学的転回、またフッサールの志向性概念を可能世界意味論によって解釈しようとするヒンティッカ（Jaakko Hintikka）の試みなどを見れば、両者の間には境界の揺らぎや相互浸透ばかりではなく、現在では積極的な対話の努力すら行われているのが分かる。

歴史的には、『論理学研究』以前のフッサールの心理学主義的傾向に対して行われたフレーゲの批判を除けば、カルナップ（Rudolf Carnap）らを中心とした論理実証主義による形而上学批判が分析哲学と現象学の最も緊張した最初の出会いであろう。ここで現象学は伝統的形而上学と一まとめにされて、「命題の意味とはその検証方法である」とい

う検証原理を掲げる論理実証主義によって、その哲学的主張の有意義性に嫌疑をかけられたのである（たとえば、ハイデガーに対するカルナップの批判）。この批判そのものは、やがて論理実証主義が分析哲学内部で乗り越えられるにつれて重要視されなくなったが、この対立は、それ以後のお互いに対する冷やかな態度を考えてみるなら、それなりに真剣な関心を両者に意識させたという点で注目すべき出来事であった。当時すでにライル（Gilbert Ryle）はハイデガーの『存在と時間』の書評において、「現象学はいずれ自己破壊的な主観主義か空虚な神秘主義に終わるであろう」と宣告していたが、この予言は現時点でははずれたようである。なぜならその後現象学は、フッサールの超越論的主観主義にもまたハイデガーの存在の思惟にも忠実に従ったわけではなく、ますます拡散と多様化の道をたどったからである。メルロ＝ポンティやサルトルの実存主義、ガーダマーやリクールの解釈学はそのほんの一例である。他方、分析哲学自身もまた論理実証主義から脱却した後に、ローティ（Richard Mckay Rorty）の言う脱超越論化の過程をくぐり抜けていた。それは実在論からのパトナム（Hilary Putnam）の転向などが端的に物語っているように、科学を含めたあらゆる言説のための究極の語彙と論理を哲学が提供する、というラッセル以来の企図がついえさったことを意味する。かくして現象学も分析哲学もともに求心的な対立軸を欠いたまま、どちらかといえば漠然と伸び広がった戦線を形成してきたのである。

しかしこの状況はむしろ、今やお互いの綱領的な立場を離れて、個々の問題自体にそった実質的な議論を局所的に展開すべき時期が到来したものと解釈した方がよいであろう。フッサールを「認知科学と人工知能の祖」として再評価する最近の動きもまた、そのような現代的状況の一つの現れなのである。→⑩

---

ウィトゲンシュタインと現象学, 認知科学 [AI]

と現象学, フレーゲと現象学 (柴田正良)

[文献] 新田義弘・村田純一編『現象学の展望』国  
文社, 1986. H. A. Durfee, ed., *Analytic Philo-*  
*sophy and Phenomenology*, Martinus Nijhoff,  
1976. H. L. Dreyfus, ed., *Husserl, Intentional-*  
*ity and Cognitive Science*, MIT Press, 1982.